

# Eureka XII

六年制通信 No.10 令和6年6月7日(金)号

## 池成月自来

あれ、何年前でしたかね。『他人を見下す若者たち』だったと思いますが、その新書の帯に（「俺はやるぜ」「何を？」「何かを」）という愚か極まりない会話が書いてあって、大笑いした記憶があります。こういう人は地に足のついていない状態で大人になった人で、始末に負えませんね。こういう人の特徴は何の実力もないのに、また努力を怠っていながら、自分は何かを為す人間だと、どういうわけか自信たっぷりと言う、そういうところにあるらしい。そして、そんな若者が増えたと言われているようですが、さて、ほんまかいな。若者はいつの時代も「今時の若者は…」と悪口を言われることになっています。私の若い時もさんざん言われました。四千年前の瓦か何かに「今時の若い奴は…」と彫られていたと、まことしやかに言われていますが、ま、これは誰かの創作でしょうね。でも、それくらい代々若者は批判されてきたという事ですな。しかし、君たちはそんな年寄りの批判を気にすることなく、ただ実力をつけることに専念すべきです。そして本当にこうしたいと望むことを見つけなくてはなりません。願うことと実力をつけること、これについて、私が学生時代によく教えていただいたことを君たちにも伝えたいと思います。

私はいつも不思議に思うのですが、昔の人は本当にどうしてあんなに実力をつけることができたのだろうか。電話もコピー機もない時代に、紙の辞書とノートと万年筆だけで、それでどうしてあんなに英語なら英語、ドイツ語ならドイツ語ができるようになるのだろうか。もちろん、「長い時間をかけて勉強したから」が答えなのでしょう。しかし、それなら現代人である時代の人に匹敵する人が出てもいいようなものですけど寡聞にして私は知りません。不思議です。教育制度の問題かもしれません。旧制高校（昭和9年生まれの人までだと思います）の時代は全国の小学生の5%しか中学校に進学できず、そのまた5%しか旧制高校へ進学できなかったと言われているから、例えば2,000人の小学生なら100人が中学へ5人が高校へ、そんな割合ですから当時旧制高校の学生と言えば大変なエリートなわけです。授業も高度なものだったでしょう。ただ、ここでまたよくわからない例が結構あるのです。早稲田大学の教授だった勝俣銓吉郎（せんきちろう）の学歴は小学校卒です。独力で辞書をつくっておられます。この名詞はどんな形容詞を伴うか、この動詞はどんな前置詞句をとるかなど、英作文をする時の必携辞書で、まえがきに50年かかったとあります。私、この辞書を知りませんで、もちろん勝俣先生の名も。それで恩師に叱られたのですね。だからよく覚えているのです。小学校卒で、その後どんな勉強をすればこうなるんですかね。勝俣

先生は明治5年のお生まれです。昭和34年の「英語青年」という雑誌に追悼号があってそれを読むと、先生が後輩に贈った言葉が紹介されています。それが「池成月自来」です。本来は仏教語で解釈も違うのですが、私は勝手に「いけなっつきおのずからきたる」と読んで、「月を求めるならまず池を作りなさい」という意味に取っています。「月」が自分のしたいことで「池」が実力です。勝俣先生はそう言いたかったに違いないと思います。何かを成し遂げたいと思うなら実力をつけ、それを為すに値する人物にならなければならない、きっとそういう意味だと思います。今、ちょうど君たちは実力養成の基礎を作っている最中です。池を掘っているところかな。だから迷わずに大きな池を作ろうとしなさい。そして、大きな池をつくっただけでは月は美しく映りませんよ。澄んだ水を湛えなければなりません。水が濁っているのは月はやって来ません。澄んだ水は自分の心持ちのことです。邪念があってはダメだ、ということです。ちなみに勝俣先生は「池成月自来」と書かれたすぐ後に同じ意味の英語の名句を添えられています。First deserve and then desire.です。中学生は辞書で引いて、意味を考えてごらん。高校生は辞書を引かずにわかるはずですよ。これがわからなかったら、まだまだ君の池は小さくて浅いということです。

#### 今週のおすすめ

・吉村 仁 『素数ゼミの謎』 (文藝春秋)

「閑さや岩にしみいる蟬の声」いいですね。あの蟬の大合唱はどう聞いてもやかましいはずなのですが、耳を塞ぐ日本人はいません、たぶん。むしろ夏を感じる大切な鳴き声で、あの声が岩にしみいるようだ、しかも上の句を「閑さ」として見事な一句に仕上げていると、私たちは芭蕉を絶賛するのです。蟬に限らず虫の音を聞き分けて季節を感じることでできる耳を持って私は嬉しく思います。

さて皆さん、ご存じでしたか。アメリカに13年と17年の周期で出てくる蟬がいるそう。名づけて「素数ゼミ」。面白いネーミングですが、そんなに長く地中にいたら出てきたときに、周囲に木が一本もなかったなんてことがあります。心配になります。この本のテーマは三つ。日本では毎年蟬が鳴くのに「なぜこんなに長年かけて成虫になるのか?」、「なぜこんなにいつぺんに同じ場所で大発生するのか?」、「なぜ13年と17年なのか?」です。氷河期を経て「素数ゼミ」が誕生していく仕組みを著者は論理的に明らかにしていきます。実に面白い。よくわかる謎解きですから、君たちもきっと興味を持つと思いますよ。カラーイラストもたくさんあって理解を助けてくれます。私はこの本でレフュージア (refugia :refugium の複数形で、氷河期に生物たちが待避した場所) という言葉を初めて知りました。氷河期でもわずかながら動植物たちが生きていける場所があったのです。蟬に限らず生きとし生けるものはそこに逃げ込んだわけ。そこから「素数ゼミ」がどのように進化してきたのか。13と17は偶然か必然か。さて、皆さんも吉村先生の謎解きを楽しんで下さい。実はこの本、買おうと思っていたらうちの図書館にありました。

BGMは Jigsaw の *Sky High* でした…。